

明治二十年代における一キリスト教雑誌

——平岩愼保の『野声反響』について——

山 本 幸 規

△目 次▽

はじめに

一 『野声反響』の書誌的素描

(一) メンヂストの機関誌の系譜

(二) 『野声反響』の発行

二 『野声反響』の思想

(一) 『野声反響』の性格と執筆陣

(二) 『野声反響』の「徳教」観——教育勸語問題を中心に

結 び

はじめに

明治二十年代の山路愛山は、従来「文学」者としての側面が強調されてきた。それに対し、筆者は、彼の素志——「精神的改革」という「天職」——に基づき、キリスト教伝道師としての行動とその思想を注目すべきであるとした。しかし、この時期のかれのキリス

ト教信仰については、未だ検討・解明されるべき課題——自由キリスト教との、特に金森通倫・横井時雄・渡瀬常吉らへの批判や論争、儒教とキリスト教の問題等——が残されている。勿論、これらは今後持続され、検討されるべき課題であるが、従来の研究のように、「現代日本教会史論」(『基督教評論』明治三十九年)等の後年の回想的叙述に無条件に依拠するならば、愛山の時代への生々しい関わりが見落されることになる。メンヂストの機関誌であり、愛山がその編輯・発行に献身した初期の『護教』に涉獵が及ばぬという事情はさておき、彼を繞る教会——神学的指導者としての外国人宣教師や、殊に、愛山をキリスト教に導き、洗礼を授け、伝道師へと誘った日本メンヂスト教会牧師平岩愼保へと研究の対象を広げる必要がある。

本稿は、筆者の愛山研究の一環としての平岩愼保研究を進めるに当り、その基礎作業として、彼の「個人誌」であった『野声反響』の全容を明らかにすることに主題を限定し、平岩の思想、更に愛山

との思想的関連については、後日の機会に詳論することとする。

- (1) 拙稿「山路愛山と基督教——明治二十年代を中心として」
『キリスト教社会問題研究』二七号（一九七七年）。

一 『野声反響』の書誌的素描

(一) メンヂストの機関誌的系譜

明治期を通じて、キリスト教雑誌が最も多く創刊されたのは二十年代である。それらの大部分は短期間で廃刊するが、その中に、これから考察する『野声反響』も含まれているのである。ところで、明治初年以來のこうした雑誌を総合的に論評した早い例に、「基督教徒の新聞雑誌及び其の記者」（明治三一年）がある。これはその表題が示す如く、キリスト教ジャーナリズムの流れと関係者を簡潔に論評したものであり、『七一雑報』以来の二十数種のキリスト教誌と十種の一般誌が挙げられている。その中で、メンヂストの雑誌について次のように述べられている。

メンヂスト諸派は新教各派の中最も響き多き団体にして、彼等は伝道界の騎兵隊なり。「中略」「六合雑誌」の創刊されし後間もなく、「美会新報」なるものありき。精密に用意せざりしものか、所謂三号雑誌の仲間埋葬れたんぬ。日本メンヂストの平岩愼保氏が、スボルジョンの「剣」と「鍔」に於ける、ピーチヨルの「クリスチアン、ユニオン」に於けるが如き機関を設けられんとにや、自己の講壇として「野声の反響」を発行せられたるは、「美会新報」の忘れられしより余程後のことなるが、野の秋草を

過ぎわたる風の吹き去りて跡なきが如く、声も留めずなりしは、遺憾千万なりと謂はざるべからず。斯くて已むべきにあらねば、メンヂストの団体にて更に大なる計画を定め、公式の機関とも謂ふべき週刊紙を発行することとなりたり。言ふまでもなく今日の「護教」是なり。⁽³⁾（傍点引用者以下同）

植村正久の著述とされるこの論評は、『野声反響』に言及した、数少ない同時代人の証言の一つである。そこでは、同誌は平岩愼保の「講壇」であるとともに、『美会新報』と『護教』というメンヂストの「公式の機関」の中間・橋渡しの位置付けられている。『美会新報』は現存が確認されていない。その消息を辿ってみると、文中にも『六合雑誌』創刊（明治十三年）後、「間もなく」発行されたところがあるが、その二〇号（明治十五年）に「東京下谷練屏町ニ寓スル一寒生」は次のように報じている。

○真理雑誌トイヘルモノアリ、聞ク所ニ拠レハメンヂストエビスコバル教会信徒諸君ノ発行ニ係ルトイフ。其第一号ハ美会新報トイヘル題号ヲ以テ、⁽⁴⁾ハラ美会（メンヂスト教会）ノ主義伝道ヲ拡張セラル、ノ目的ナリシ由ニ承ハリシカ、其議ハ後ニ至リテ止ミタルモノト見エ第二号ヨリ今ノ題ニ改リテ⁽⁵⁾広ク義教ヲ論シ公会ノ利益ヲ計ラル、モノ、如シ。「中略」去ル二月十一日刊行ノ第三号ヲ見ルニ、全冊従頭至尾一モ見ルニ足ルモノナク宛ラ下等小学ノ作文ヲ編集セルモノナルカト恠マル、ナリ。⁽⁶⁾

誌面に対する酷評はさておき、この「一寒生」の報告によって、『美会新報』は明治十四年末に美以教会から伝道拡張の目的をもって発行され、二号（明治十五年一月カ）から『真理雑誌』と改題

されたことが伝えられている。ここでは三号まで存在が確かめられるが、それ以後の消息を迎ることができない。前引文中でも比喩されたように「三号雑誌」に終ってしまったのかもしれない。

明治二十年代に入ると、『メソヂスト教会新誌』の存在が伝えられる。それは、明治二十一年十月に美以教会と日本メソヂスト教会双方から委員を出し、月刊から半月刊への改革を行なおうとした。しかし、その改革は失敗し、翌年十二月頃『真理の鏡』と改題した。⁽⁶⁾更に、二十三年七月には週刊とするために休刊されたが、その後消息は途絶えてしまう。『基督教新聞』『福音週報』と鼎立するメソヂストの週刊紙は、その一年後の『護教』創刊によって実現されることになる。

一方、美以教会は、明治二十三年二月、その経営する東京英和学校(後の青山学院)から『須論』(同校内聖風社)を発行し、二十五年に『青山評論』と改題された。同じく美以教会の長崎の学校(カブリー学校)から『鉄硯』(創刊年未詳)が発行されていたのである。

注

- (1) 明治二十年代のキリスト教雑誌の研究については別稿を予定しており、詳細はそれに譲る。
- (2) 『福音新報』一六五—一八号(明治三一・八・二六—九・一六)。
- (3) 同誌一六七号二ページ。
- (4) 『植村全集』第七卷(昭和七年)原文は無署名。
- (5) 『六合雑誌』二〇号(明治一五・二・二八)評説、二五九—六〇ページ。
- (6) 『基督教新聞』二七一号(明治二一・一〇・三)三ページ。

(7) 同誌二八一号(同二・一二)三ページ。

(8) 『福音週報』一六号(明治三三・六・二七)四ページ。

(二) 『野声反響』の発行

平岩恒保(一八五七—一九三三)は愛山と同じく幕臣の家に生れた。彼は明治八年十一月、カナダ・メソヂスト教会宣教師カックラン(George Cochran)から受洗、十年教職試験になり、十四年九月に按手礼を受けた。その後、甲府・静岡の教会を経、二十年六月から麻布メソヂスト教会を牧した。この頃、「先生(平岩)は伝道及び牧会に力を致され、傍ら学校(東京英和学校)の方にも勤めて居られた。而して伝道の機関として月刊雑誌『野声反響』を発行し、御自分の説教を載せて居られた。其編輯は小沢孫太郎氏が担当してゐた。之は約二年位継続されていたやうである」と伝記にみえる。⁽¹⁾同じ伝記の中の他の記述と併せて、『野声反響』は、(一)平岩の個人経営の月刊誌、(二)小沢孫太郎が編輯、(三)明治二十二年から約二年間継続、(四)平岩の説教・「時事問題」の論評を掲げていた、等の諸点について述べられているが、平岩の雑誌発行の動機についての言及は見当たらない。ただし、自身が委員をつとめていた『美会新報』—『真理の鏡』の廃刊に加え、美以教会ではすでに『須論』、『鉄硯』といった雑誌を発行していたこと、更に、一般雑誌界にもみられる如く、キリスト教会のリーダーの一人として新しい時代風潮に積極的に参画しようとしたこと、などが推測されるのである。

ところで、『野声反響』の発行をいち早く伝えたのは『福音週報』であった。

野声反響⁽⁷⁾は平岩愼保氏及び其他有名なる人々の説教、論説等を掲載し、日曜日に会堂に出づる能はざる人の糧とならんとするにあり、委細は広告に付て見らるべし、宗教界も一つの勢力を加へんとす、吾人の心強さ知るべきのみ。⁽⁴⁾

そして、文中にもある様に、創刊号広告が掲載された。

野声反響 第一号 本月十日発行 毎月廿日発行

「野声反響」は一教会、一宗派の機関にあらず、独立独歩の雑誌なり○其掲ぐる所は牧師平岩愼保氏の説教及び有名なる内外諸名家の論説等とす○其掲くる所の文字は正面的、實際的、通俗的を旨とす○其目的は教会に出席して説教を聴聞すること能はざる者の為に心靈の糧を供し且つ未信者を導かんと欲する人の為に便を供するに在り○第一号には…公共の正直…耶蘇の流血…品格の造営…○平岩愼保君の説教…大蔵次官渡辺国武君…○前ハワイ総領事安藤太郎君両氏の論説其他雑録を掲ぐべし○定価 一部前金七銭(中略) 五部以上一割引十部以上二割引郵税無料広告料廿字一行に付一回五銭

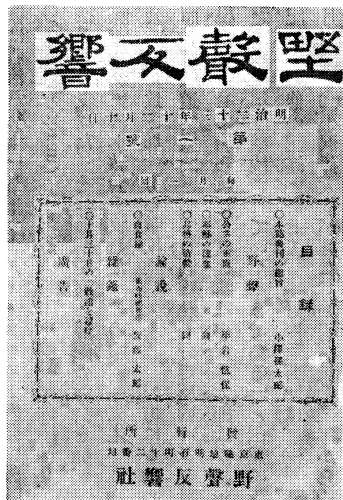
東京築地明石町十二番地 野声反響社⁽⁶⁾

先の紹介文はこの広告の前半部分に基づいたものであった。これは明治二十三年の記事であり、予告通り『野声反響』第一号は同年十二月十日に発行された。前の伝記は、この雑誌の発行時そのものに誤りがある。そこで、以下、原本に基づいて同誌の全体像を検討しておく。

現存が確認される『野声反響』は、東大法学部明治新聞雑誌文庫(七号のみ)、同志社大学図書館(一・二号)⁽⁶⁾に所蔵されている。そ

こで、同志社大学所蔵本(図書館請求番号B80・T・Y6)によって、まず書誌的な説明をしておく。

同所蔵本は一一号分が合冊製本され、縦二〇・横一四厘に裁断されている。表紙は薄茶色(赤色もある)である。表紙には題号の他に目次が掲げられ(図版参照)、見返しは二段に分れ、上段に「野声反響例言」(一号は全面)、下段は前号目次(八号のみ広告)に当てられている。裏表紙も二段に分れ、上段に広告、下段は定価表・配達規則・奥付がある。



『野声反響』創刊号表紙

頁数は四八―五二ページで、「野声」「論説」「雑録」「広告」(八号のみ「批評」)の四欄に分けられている。本文には五号活字が用いられ、野声欄は一ページに二四行、一行に四一字、論説・雑録欄は同じく一八行、四二字である。

定価は一部七銭、六部四〇銭、一二部八〇銭で、送料が含まれて

いる。大口需要者に対して、五部以上二割、十部以上三割の割引がなされた。殊に、伝道師・バイブルウーマン・学生の購読者には一部五銭、伝道のために数十部以上を必要とする時には定価の二分一（二銭五厘）で頒布するといった配慮もある。

奥付によると、発行兼印刷人は平野善太郎、編輯人は小沢孫太郎、発行所は前引広告と同じである。同所は美以出版会社の所在地であり、その中に野声反響社がおかれていたことになる。同社は二十四年四月、書籍部・出版部が分離独立し、前者はメソヂスト出版舎として京橋区竹川町九番地に移転し⁹⁾、後者は美以活版所として明石町に留まった。同年末には美以活版所は閉鎖されるが、この借用人が美以教会員の平野善太郎であった。

編輯人の小沢孫太郎は明治十九年に甲府で受洗し、翌年東洋英和学校神学部に入學、二十四年に卒業する。したがって、『野声反響』創刊当時は神学生であった。彼は同年七月の年会で山梨県の東部教会の主任教師に任命され、谷村部新町講義所に赴任し、地方紙を媒介としたユニークな伝道活動を行なった¹⁰⁾。したがって、彼が実質的に編輯を担うのは二十四年六月（七号）までであると思われるが、奥付には一一号まで編輯人に名が挙げられている。彼の離京後は、彼にならって東洋英和学校の神学生が編輯に当たったと思われる¹¹⁾。

各号の発行日は、明治二十三年十二月十日（二号）、同二十四年一月二十日（三号）、二月二十一日（四号）、四月二日（五号）、四月二十一日（五号）、五月二十一日（六号）、六月二十日（七号）、七月二十一日（八号）、八月二十五日（九号）、九月二十五日（一〇号）、十月二十六日（一一号）である。しかし、表紙の表示は各月の「廿日」（一、二

号は奥付と同じ）となっており、予定通り発兌されたのは二、七号にかすぎない。ことに四号の極端な遅れは平野善太郎の病気が原因であるが、こうした遅れは、編輯上の理由によるのであろう。

一般に、雑誌の終刊の時期を確定することは、誌面にその表示がないと、困難である。『野声反響』も、現存する一一号には終刊に関する何らの言及も、またそれらしき徴候もみられない。「約二年位継続された」という前引の記述からすれば、少くとも二〇号くらいまで発行されたと思われる。ところが明治二十五年に入り、『福音新報』は次のような記事を掲げ、『野声反響』の終刊を伝えた。

平岩氏最近の護教に広告して云く、野声反響は小沢孫太郎氏編輯の勞に当り、平岩氏説教の原稿を集め、美以活版所借用人平野善太郎氏出版したるものにて、會計出納は平野氏自ら之に任じ、平岩氏の毫も与り知らざるなり。昨年十一月其の第十二号出版の際、活版所閉鎖し、帳簿は紛雜し、発行期日は経過し、自然廃刊に至りしものなり¹²⁾。

したがって、同志社大学所蔵本が『野声反響』の全てであることになる。とまれ、この「広告」を出すまでに当事者の続刊への努力が払われたと思われるが、実質的な発行母体である美以活版所閉鎖という事態の外に、名義上とはいえ小沢が既に離京していたこと、メソヂストの機関誌として『護教』が発行されており、平岩自身が発行人としての立場にあったことなどの事情が、『野声反響』の再興ではなく廃刊という結果を導いたと思われる。

注

- 1) 倉長観『平岩恒保伝』（昭和十三年）六八ページ。

(2) 同書一八〇—一ページ。この部分は平岩と雑誌の関係を述べている。

(3) 西田長寿『明治時代の新聞と雑誌』（昭和三十六年）参照。また、仏教ジャーナリズムにも同様のことがいえる。上坂倉次「明治の仏教新聞」『仏教』一卷七号（昭和一〇年）参照。
 (4) 『福音週報』三九号（明治二三・一二・五）二ページ。
 (5) 同一五ページ。同じ広告は『基督教新聞』三八五号（同）にもある。

(6) 『明治新聞雑誌文庫所蔵雑誌目録』（昭和五四年）。

(7) 『同志社大学雑誌新聞総合目録』（昭和四四年）。

(8) 「社告」『野声反響』五号裏表紙見返し。

(9) 『護教』の場合、このメソヂスト出版舎内に護教社がおかれていた。

(10) 『基督教新聞』四一七号（明治二四・七・二四）三ページ。

(11) 「虎城生の寄書」『福音新報』三〇号（明治二四・二〇・九）六一七ページ。

(12) 倉長「加奈陀メソヂスト日本伝道概史」（昭和二二年）には、「当時の神学生達」が『野声反響』の編輯を手伝ったと、複数で表わしている（五七ページ）。

(13) 「看客諸君に稟告」及び平野の広告文『野声反響』四号裏表紙見返し。

(14) 「野声反響の末期」『福音新報』五六号（明治二五・四・八）一四ページ。

二 『野声反響』の思想

(一) 『野声反響』の性格と執筆陣

『野声反響』の各号に「野声反響例言」（以下「例言」）が掲げられている。まず全文を引用しておこう。

一本誌ハ一教会、一宗派ノ機関ニアラズ、独立独歩ノ雑誌ナリ、
 二本誌ニ掲グル所ハ平岩愼保氏ノ説教、及ヒ有名ナル内外諸名家ノ論説等トス、

三 本誌所掲ノ文字ハ、正面的、實際的、通俗的ヲ旨トス、
 四 本誌ノ目的ハ教会ニ出席シテ説教ヲ聴聞スルニ能ハザル者ノ

為ニ心靈ノ糧ヲ供シ、且ツ未信者ヲ導カント欲スル人ノ為ニ便ヲ給スルニ在リ、

五 本誌題シテ「野声反響」ト云フ所以ノモノハ、我國徳教ノ荒野ニ絶叫シテ、聊カ道義ノ上ニ益スル所アラントスレバナリ、世間惑ヲ之ト全フスルノ士ハ、請フ本誌ニ寄スルニ金玉ノ作ヲ以テスルヲ惜ム勿レ、

前の創刊号広告の前半部はこの「例言」一—四が用いられているのである。そこで、この「例言」にそつて、『野声反響』の雑誌としての性格をみていこう。まず、「例言」二で述べられているように、同誌は平岩の説教を中心として編輯されている。野声欄に説教が掲載され、全号で三九篇（草稿も含む）が収録されている。その内平岩のものが三一篇を占め、小林光泰（日本メソヂスト教会、本多庸一・田村武治・小方仙之助（美以教会）、田村直臣・奥野昌綱・星野光多（日本基督教会）、そしてムーデーの説教が各一篇づつである。平岩の

説教を内容に亘って検討することはいま紙幅が許さないので、控えるが、説教の典拠とする聖句は、新約の路加伝六篇以下同、摩太伝(五)、馬可伝・約翰伝(各三)、以弗所書・羅馬書・提摩太後書・希伯来書・彼得後書・約翰第一書(各一)、旧約の詩篇・箴言・但以理書(各一)である。野声欄は、各号二四—四一ページ、割合からみると四六% (八号) — 八五% (二号) の誌面を占めており、当時のキリスト教誌に説教欄が設けられても、これほどの割合をもつものはない。ここに、『野声反響』のきわ立った特徴をみる事ができる。一方、論説欄には、山路愛山(三篇)、平岩・江原素六(各二篇)、カックラン・小林・ホイチントン(R. Whittington)・原野彦太郎(各二篇)ら、日本メソヂスト教会関係者の他に、安藤太郎・渡辺国武・田村武治・月峽居士・ステープンス(各一篇)らの著述がある(連載も一篇とした)。この執筆陣の顔触れは、「一教会、一宗派」を越えた独自の立場を形成しようとする「例言」一の趣旨からみれば、同誌がメソヂストの機関誌であるとの評価をうみだす性格をもっていたのである。

文体については、野声欄は口語体(草稿を除く)で表記され、ほとんどの漢字にルビがふられているが、論説・雑録欄は文語体で、一切ルビはふられていない。野声欄の配慮は、それが説教の筆記であることとともに、「例言」四とも関連しよう。この四について、読者にキリスト教を理解させ、殊に教理上の疑問を解くことにあると思われるが、事実、一読者は平岩の説教(「奇蹟通論」二号)によって、「奇蹟の義」につき「大に了解する所有之」と伝え、応分の目的が果たされたようである。このことは『野声反響』は平岩の牧会活動の

延長上に位置することを意味している。

ところで、『野声反響』の表紙には「基督教之關鍵」(四号)「耶蘇教の指南車」(五号)「福音之鈴」(六号)「人類社会の説明者」(七号)という言葉が掲げられている。これは「例言」五でその由来が述べられた「野声反響」という型破りな、しかも意欲的な題号と併せて、『野声反響』の姿勢の強さを示している。

さて、同誌の論調であるが、その主題とした「徳教」について、平岩の説教の他に、江原「真誠功名の説」(六号)、田村武治「家族」(八号)、愛山「閨教論」(九一〇号)、などがあり、江原「急務中ノ急務」(八号)は殊に商業活動における経済倫理について述べており、神学的な立場からホイチントン「基督教倫理学」(七・九号)がある。教理に関して、カックラン(佐藤閑理訳)「有神教理の変遷」(二四号)、ハワード(辻沢忠斎訳)「科学的法式により基督を批判す」(五一六号雑録)、原野彦太郎「贖罪論」(八号)などがあり、殊にカックランの論文は「必ず一読せざるべからざるもの」との高い評価を受けた。正統派の立場から自由キリスト教を論じたものに、小林「余が宇宙神教を信ぜざる理由」(五号)、平岩「神学と基督教の差別」(同)等、さらに次第に重要視されつつあった外国人宣教師問題について、平岩が「在日本外国宣教師に敬告す」(六・八号)を発表している。

以上みてきた『野声反響』の立場は、創刊に先立ち宗教界の「一つの勢力を加」えることされ、二号発兌に際して「本誌全体の有様一層整頓したるか如く頗る末頼母し、願くバ号を追ふて健全なる発達をなさんことを」との期待に沿うものといえよう。つまり、自由キ

リスト教の流入により動揺し始めたキリスト教界の中で、「正統教会の誕兒」と自称した『護教』⁽⁶⁾のように、『野声反響』は正統的キリスト教の「指南車」「鐸鈴」たらんとしたのであった。

注

- (1) 表紙目次には「月弄居士」とあるが、本文に従った。本名不詳。
- (2) 平岩宛重野健造（静岡師範学校幹事）書簡（「不敬事件に関する書簡」）『野声反響』四号四五—五六ページ（雑誌）。
- (3) この講演筆記は、明治二十五年二月、桜井成明訳により、同じ表題で基督教書類会社から一冊のパンフレットとして刊行された。これと比べると、雑誌掲載のものは簡略化されているようである。
- (4) 『福音週報』四七号（明治二四・一・三〇）二ページ。
- (5) 同前。
- (6) 前掲拙稿参照。

(二) 『野声反響』の「徳教」観

——教育勸語問題を中心に

『野声反響』の主題は「徳教ノ荒野ニ絶叫シ」その反響を呼び起こすことにあつたが、それは小沢孫太郎の「本誌発刊の趣意」で一層強調されている。長きに亘るが全文を引用しておく。

大旱四年、地は其産を絶ち、民は其食を失へるは、湯の時に於ける七年の旱魃と共に、空前絶後の災害とこそ云ふへけれ、時にカルメル^{イタリヤ}の嶺、地に伏し、其面を膝の間にして、雨を禱れる者を、

預言者エリヤとす、彼其少者^{ツカヤセ}に謂ひて曰く「請ふ登りて海の方を望め」と、彼其言の如くすること七次に及び、回り報じて曰く「視よ海より人の手の如く微の雲起る」と、エリヤが為にアハブに遣れる急使は、蓋し中途にして、八娘^{カゼのカミ}が霄漢^{ソラ}に驅せ来れる黒雲より、沛然、滂然として漉き出せる、灑雨の襲ふ所となりしなるべし、ヤコブ其結果を記して曰く「地その産を萌出せり」と、

今是我国道德界の大旱魃なり、誰か陰雲の雨を天心に輪り来り、一瀉千里、傾盆の勢を以て、此荒野を潤すことを望まざらん、我「野声反響」の起るや、実に地中海辺にエリヤの少者が彼に回報せる、手様の微雲なるより微なり、然りと雖も、其後來に期する所へ、天恵の膏雨へと進化した、以て道德界の大旱魃を除き、地をして再び其産を萌せしめんとするに在り、

若し夫れ成功と失敗とに至りては、自ら数の定まれるもの有て存するなるべし、故に「野声反響」ハ、其身命を「適者生存」号に托して、狂風怒濤の大海に航せんのみ、無難に平安の港に、錠を投するを得、バ幸甚しと雖も、過て某外国船が紀洋に於ける覆轍を踏むことあるも、敢て憾とせざると同時に、他雑誌と競争して之を倒し、以て己を立てんとするが如き野望ハ「野声反響」のなし能はざる所なり、（片仮名各キレは聖書に基づき、引用者が付したものである）

小沢はまず、列王紀略に基づいて預言者エリヤの事蹟を引照し、それをヤコブの言葉で意義づける。次いで「道德界の大旱魃」という現況の中で、行末はエリヤの預言した「天恵の膏雨」へと進化するべき一滴たらんとする『野声反響』の抱負を述べる。そこには、唯一神信仰確立に多大の寄与をしたエリヤをもち出すことで、日本とい

う「地」に「産」、すなわち新しい生命を萌出させるものがキリスト教に他ならないという主張を強く打ち出している。そして、『野声反響』を大海を行く船に例えて航行の思いを表明するが、結果的には教界内の淘汰ではなく「狂風怒濤」にもまれ、一年足らずして廃刊となつてしまつたのである。

この『野声反響』の「徳教」観を検討する時、同誌の創刊に先立つ約一カ月前に教育勅語が發布されていることを忘れてはならない。というのは、右の発刊趣意に言う「道德界の大早魃」に対する姿勢は、教育勅語を論評した「十月三十日の勅語を読む」(無署名、一号)の中で具体的に陳述されているからである。

我が邦維新以来茲に年を重ねる僅かに二十有余年、格物致知の道大に開け世の所謂物質的文明の度々著しく進歩したり。然りと雖ども独り徳教の如き其進歩に伴はず、或は維新以前に比制して退歩したる如き非況なきに非ず。今や我が国体の精華と称する忠孝信義の道、既に人心を御するの權を失ひ世間徳義を重するの精神甚だ乏し、此れ識者をして夙に悲泣歎息せしめたる事実にあらずや。

つまり、「道德界の大早魃」は明治社会の物質的進展に在来の倫理である「忠孝信義の道」が既に「人心を御するの權」を喪失したことから生じた、というのである。そして、明治国家の教育勅語發布の意図を「我が国民の單に物質的文明の途上に狂奔するを呼び止め、翻て祖先の美風を記憶せしめ、以て物質的事物と徳義風教の進進、真誠なる文明の域に致らしめんと欲し賜ふて然せしならん」と忖度するとき、勅語起稿者のキリスト教排撃の立場に夢想だに及ば

ぬどころか、勅語の「精神」とキリスト教——『野声反響』の唱えんとする「徳教」が同一化されていく。

今や我邦社会の組織全く一変せり、(中略)此一変せる新社会に於て我が国民をして天道を守り、人倫を立て、以て其人たる天性を全ふせしめ、以て我が国体の精華を維持せしめんにハ、更に一大新力を要す。(中略)耶蘇教即ち天より来れる斯の大新力なり、我國民其真意を悟り、之を奉するに到れば、現今徳教の悲況を救ひ、善く君に忠に、父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信し、愛國の情に篤く、以て祖先の遺風を持續して更に光輝を放たんこと復疑ふべからず。

社会の進展に伴つて倫理も変るということは明治初年以來のキリスト教徒によつて唱えられ、また、維新以來の物質的發展と倫理の停滞という跛行性も、すでに『六合雜誌』創刊時に唱えられていた。⁽²⁾しかも、二十年代に入ると、禁酒・廃娼などの具体的な道德改良運動が強く推進され、多くの雑誌も発行されていた。しかし、この時期にはもはや西洋文明を一元的に理想化することはできなかった。キリスト教徒といえども、西洋の国王とは類を異にする固有の血統をもつ「無比」の存在としての天皇の臣民であるという国民性が憲法によつて明文化され、更に教育勅語は宗教的表現を避けて絶対的な価値基準(「皇祖皇宗の遺訓」)を設定することで、表面的には異文化の宗教であるキリスト教をも包摂する「普遍」的側面をももっていた。

『野声反響』はすでに失墜した「忠孝信義の道」を「国体の精華」ととらえ、それを再生させ「祖先の遺風を持續して更に光輝を放つ」「一大新力」こそがキリスト教であるとして、表現上の類似

も併せて、勅語とキリスト教を関係付けた。

しかし、こうした楽天的な思いとは裏腹に、教育勅語はキリスト教排撃の新たな拠り処となった。度重なるキリスト教徒の「不敬」事件や「宗教と教育の衝突」論争を惹起・誘引し、キリスト教界に大きな打撃を与えたのである。それは明治二十四年一月、内村鑑三不敬事件として早くもあらわれた。事の起りは、第一高等中学校の始業式上、囑託教員でキリスト教徒の内村が教育勅語の宸署拝礼を躊躇したことにあつた。ジャーナリズムは「尊影拝礼の拒絶」という誤聞も交え、一勢に内村の「不敬」を非難し、併せてその鋒先はキリスト教そのものの排撃へと向けられた。

『野声反響』はこの問題について、平岩の「第一高等中学校不敬事件に就て」(三号)を掲げた。前半は内村の「尊影拝礼」拒否という誤聞に基づき肖像拝礼について論じ、後半では直接内村から事件の真相を聴問したのち、改めて勅語(宸署)拝礼について意見を述べている。肖像拝礼について、「耶蘇信者たりと雖、固より我(わが)天子の尊影に對し敬礼を尽す、猶、天子御自身に對するに異ならず、是れ君臣の分たり、情たり」と述べ、「宗教的分子を含まない」人間社会君臣間の敬礼にすぎないとした。したがって、それを拒絶した内村を「天子に対して不敬の所爲なり」(原圖忠)と批判する。しかし、真相が判明した後、「其所爲の不敬なるや否やハ、之を論評せざれども」と速断を避け、勅語捧読の儀式化とジャーナリズムへのキリスト教攻撃の反論へと主題を移す。その儀式化については「新奇のこと」として難色を示すが、そこでの拝礼が「皇上に對する敬礼なり」と云へるが満校の輿論ならば、内村氏は之に背くべからざ

るなり」と現実を迫認する姿勢をみせる。しかし、「彼キリスト教徒」の精靈なきものは拝せずとの信念ハ玉体に接するに非ざれば鳳輦に對すと雖とも敬せずといふの結果を生ず」というジャーナリズムのキリスト教非難に對して、「勅書に對する大切な敬礼ハ、之を拝読するとき、謹慎敬聴すること、主上の前にあるが如く、又其御主意のある処を服膺し、能く之を身に遵守するにあり」との自身の勅語觀から反駁し、「吾人ハ上野博物館に行き、樓上に列置せる御鳳輦に向ひ、一々低頭せざるを得ず、又皇城の御門傍を往來する時一々低頭拝礼せざるを得ず。又主上の御乗馬ハ、之れに逢ふとき一々低頭拝礼せざるを得ず」と耶喻する。それは四号雜錄「村越蒼洲を切れノ画双紙屋の前に跪けノ日本の歴史を読む勿れノ歌かるたを遊ぶ勿レ」(無署名)で頂点に達する。

如何となれば村、蒼ハ彼の鍍細工に由て至尊の御像を造り、落語家、河原乞食、手品師等の像と一列に陳し見せ物となしたればなり、如何となれば各画双紙屋に至尊の御像を囈ぎ居ればなり、如何となれば其毎葉に御名あり、又処々詔敕を見るが故に到底拝礼の煩に堪へざる可ればなり、

如何となれば御名御咏問々其中に散在してあるが故に是又拝礼の煩に堪へざる可ればなり、

このように、平岩——『野声反響』は、キリスト教攻撃には徹底して戦うが、肖像拝礼・勅語捧読そのものに対しては天皇との人格的關係を応用し、宗教的・信仰上の問題にまで昂めることはなかった。また、直接言及されていないが、愛山生「徳川氏」對「羅馬

教」(四号)にも、同事件に関連した意見をみる事ができる。それは天草の乱という歴史的事件に素材をとりつつ、信仰迫害を国家的レヴェルで問題とする。

然れども主義へ其信仰たり、抽象的の理論たる間に於て国家の上に影響を及ぼすべきものに非ず、若し信仰如斯し理論如斯の前提より単刀直入に帰結を推究して干渉せんとせば、直ちに人をして見せしめず思はしめざるに如かず、分明是れ渾ての人心を殺しんとする者なり、封建制度如斯にして始めて維持すべくんば是れ封建制度へ人心を殺し了する者なり、

愛山の歴史認識において、類推的方法によつて過去は現在に相通することになる。この一文も、「今」について論評しているののであつて、明治国家の宗教への姿勢如何によつては、崩れ去つた「封建制度」の二の舞になるとの警告である。「如何なる場合にも宗教上の迫害は害悪なり」との結論は、思想・信仰の自由を求める愛山なりの表明であつた。

ところで、こうした平岩——『野声反響』の内村事件への対応はどのような位置にあつたのであろうか。強硬派と目された人々(押川方義、植村正久、三並良、丸山通一、巖本善治)は『福音週報』等に共同声明を発表し、国粹主義者に論戦を挑んだ。特に植村は、「吾人は新教徒として、万王の王たる基督の肖像すら礼拝することを好まず」との立場から、天皇の肖像拝礼を拒絶し、勅語拝礼も学校当局者の「痴愚なる頭腦の妄想」から「紛議を生ずべき習慣」を作り出したのであり、単なる反駁に留まらず、小・中学校から「是等の習俗を一掃することは国民の義務なり」とまで断言し、そのために『福音

週報』は発禁処分となつた。植村のこの姿勢は、どこまでも宗教上の問題とし、信仰の問題として勅語拝礼をとらえようとしたのである。この植村の姿勢からみれば、平岩の「主上の前にあるが如く」とのそれはきわめて消極的であることが瞭然である。丸山通一は、平岩の対応を「応変政治」に庄倒された「枉意主義」であり、「其の抽象的の理論に止まると、基督教の歴史を顧みざると、将来の利害を慮らざる」との欠点を有するものであると酷評したのである。⁹⁾丸山は同じ論説の中で、内村事件が「教会全軀の輿論」とならず

注

- (1) 梅溪昇「明治前期政治史の研究」増補版(一九七八年)第三章「井上毅の思想的性格」参照。
- (2) 「六合雜誌発刊ノ趣意」『六合雜誌』一号(明治二三・一一)。
- (3) この譜伝は、後にも長く続く。山路愛山「現代日本教会史論」開国百年記念文化事業会編『明治文化史』第六卷「宗教」編(昭和二年)参照。
- (4) 平岩の天皇観は「聖寿万歳」(二号、野声)で窺うことができる。それはダニエル書に基づき、「聖寿の万歳ならんことを

結 び

祈るべき」であると説いている。その理由として、(一)「睦仁陛下は私共の皇帝」であること、(二)「私共に対して最多の善」すなわち、封建制の打破、人民階級の矯正、教育制度の完備、外交・権利の拡張、そして信仰自由の公認などを「なし下された」ことを挙げている。これは、契約的観念をもって天皇を観ていたことになろう。

- (5) 平岩の論説に対する読者の反応は投書によって窺われる。一つは、大体において肯定するが譬えが「極端論」であるというもの(「在峡松野源四郎氏より」四号雑誌)、もう一つは、全く賛同するもの(前掲「不敬事件に関する書簡」)であった。
- (6) 愛山の歴史認識と、思想形成におけるその位置付けについて、拙稿「近代日本の市民思想——山路愛山」(今中寛司編『維新変革思想の研究』未刊)で、筆者の見解を明らかにしておいた。

(7) 小沢前掲書。

- (8) 「不敬事件と基督教」『福音週報』五〇号(明治二四・二・二〇)——一ページ。

(9)(10) 「基督教会拝像曆」(歴)史一斑』『真理』二〇号(明治二四・五・三〇)三八五—八ページ。丸山がこの中で指している平岩の論説について、これまで何らの言及がなかった(小沢前掲書参照)が、本論中で紹介した「第一高等中学校不敬事件に就て」であると思われる。

明治二十三年末から一年足らずの期間に、わずか一号しか発行されなかった『野声反響』は、キリスト教の代表的な雑誌である『六合雑誌』や『女学雑誌』⁽⁹⁾などから見れば、「三号雑誌」の部類に入ろう。だが、当時のキリスト教雑誌の大半が数年ならずして消息を絶ったことを思えば、必ずしも特異ではない。明治三十年代に入ると、「野声の反響」と題号が誤まって伝えられたのも已むを得なかったとはいえ、多くの雑誌がその存在すら伝えられなかったことに比べれば、『野声反響』が他誌と異なったものとして、評者の脳裏に印象づけられていたことになる。それは、外的には神学的動揺の中で、『野声反響』が正統派キリスト教の新しい勢力を形成しようとした意欲と、雑誌そのものの性格からすれば、平岩恒保の説教を中心とする編集の独自性にあった。平岩についていえば、直接に発行人・編輯人を名乗らなかったが、同誌の発行は彼の牧会活動の延長に位置する事業であったといえるのである。

『野声反響』の創刊は、時恰も、国民の精神的統合を意図した教育勅語発布の直後であった。キリスト教という普遍宗教に立脚する『野声反響』はその「普遍」と伝統という「特殊」の狭間で、歴史的に無力化した伝統倫理(「忠孝信義の道」)を「国体の精華」ととらえ、そこにキリスト教を鼓吹するという立場をとった。ここに『野声反響』の「徳教」論の基礎が据えられたのである。しかし、内村鑑三の「不敬」事件が教育勅語の宸署拝礼を契機として発生したとき、それは宗教外の社会的儀礼であるとして、偶像崇拜に係わるキ

リスト教信仰の問題とされなかった。その儀式化についても現実の事態を追認し、「応変政治」に屈した「枉意主義」であると批判されたのである。ある意味では教界の大勢を代表した意見であったとしても、そこに、明治二十年代から長く続くキリスト教の「試煉の時代」をもたらした教界内部の姿勢が看取されるのである。

平岩一個人に限定してみれば、やがて『国体と基督教』（明治二十七年）にみられる国体論成立において、明治十年代の「弁妄批評」「我邦に於て神道仏法の後状如何を論ず」等の在来宗教批判を「国体の精華」へと結晶させる過程に『野声反響』は位置し、その素型をみることができるのである。

最後に、『野声反響』における山路愛山について簡単にまとめておこう。彼の立場は同誌八号表紙に「次号より愛山生の傑作に係る閨教論を連載す」との予告が掲げられたこと⁽³⁾に象徴されよう。表紙に『野声反響』そのものをアピールすること⁽³⁾が掲載されることはあったが、個人に言及されているのはただこの一例のみである。ことさらに愛山の「閨教論」を表紙に予告したことは、それが同誌の目的に沿う論説であったことが主因であるのではなく、むしろ、「精神的改革」を唱える若き伝道師として、教会内で囑目される存在として愛山があったこと、更に、その名を出すことによって、逆に雑誌そのものの性格がアピールされる、そうした立場に愛山が立っていたことを意味していよう。

注

- (1) 『六合雑誌』は明治十三年から大正十年まで四八一号が、『女学雑誌』は明治十八年から三十七年まで五二六号が発行された。その他、『基督教新聞』や『福音新報』、『護教』の週刊誌は改題などを繰り返しながら昭和期まで継続して発行された。

- (2) 参考のためその目次を掲げておく。第一段緒言、第二段我が国体（其一）精華、第三段我が国体（其二）神道、第四段基督教の教旨、第五段国家主義と基督教、第六段国粹保存。

- (3) 『野声反響』の第八号広告（『基督教新聞』四一八号、『福音新報』二〇号）にも、同文の予告がなされている。